

稲葉 光行（立命館大学政策科学部教授）

それでは引き続き、最後の挨拶だけ本当に手短かにさせていただきます。閉会の挨拶ということで引き続き稲葉が担当させていただきます。

時間がないうちで話すことではないかもしれませんが、私が学生時代に流行った「ニュー・アカデミズム」という言葉があります。そこでは、既存の学問が持つ構造主義的なしほりから自由になり、ポスト構造主義、あるいはポストモダンとして、既存の学問の枠組みからどんどん抜け出して、「軽やかに知と戯れる」ことを目指そうといった、運動のようなものがありました。私も若い頃はそういう本をたくさん読んで、既存の知の枠組みには構わずに好きなことをやってみようと思い、興味のおもむくまま様々な分野の勉強をしていました。

しかしそれから何十年が経過した現代において、我々の周りには、さまざまな喫緊の課題、高齢者・子育て、対人援助の問題、あるいは司法の問題など、ありとあらゆる複雑で深刻な社会問題が目前にあります。少なくとも我々は、「軽やかに知と戯れている」場合ではないという状況にあると思います。

そういう中で、混合研究法のコミュニティの中でいろいろな方々とお話をすると、医学、看護、福祉、教育学、あるいは私のように情報科学といった、専門分野が異なる人たちが集まり、知恵を出し合って複雑な問題を理解し解決しようという強い意気込みを感じます。つまり、既存の学問の枠組みを超えたオープンなやり取りが奨励されています。これは日本でも国際会議でも、混合研究法のコミュニティは同じように、オープンなディスカッションが奨励されていると感じます。

このようなことを考えれば、我々は「軽やかに知と戯れる」ための「ニュー・アカデミズム」をしている状況ではないとしても、問題解決のために既存の学問的な枠組みからはもっと自由になるというスタンス、言わば「オープン・アカデミズム」のような運動が起きているのではないかと最近思っているところです。そして混合研究法は、その運動の中心にあるのではないかと私自身は考えています。

人間科学研究所でも、対人援助や人間科学の諸問題にせまるために、さまざまな専門家が集まり、いろんな方法でアプローチしながら、自由な討論や交流をつづけてきました。そして研究所でも、混合研究法が持つオープン・アカデミズム的な考え方をさらに取り込んで、社会貢献に繋げるような形ができればというふうに考え、今日の総会をそのような方向性で企画させていただきました。今日の集まりがそういうことを考えるきっかけになればなというふうに思っております。

ということで、私の最後のコメントは結果的に2分を超えてしゃべってしまいましたが、一応これで閉会の挨拶とさせていただきます。

最後に、松田所長、また会場のセットアップ等準備にご尽力いただいた人間研のスタッフの方々、どうもありがとうございます。それから、ご登壇された先生方、またフロアにしながらコメントをされた方々にも感謝申し上げます。また、本日お越しいただいた皆さま方にも感謝申し上げます。この場に貢献していただいた皆さま方に拍手をして、この総会を終了とさせていただきたいと思えます。(拍手)。

本日は長時間本当にどうもありがとうございました。少し時間を過ぎてしまいましたが、これで人間科学研究所の本年度の総会を終了とさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。